「お弁当がつなぐ家族のバトン」

かとうけ　（50 代）

充実した大学生活を終え、娘は銀行に就職し、毎日お弁当を持っていくことになった。

学生時代に使ったお弁当箱はいつの間にか古びていて、新しく買い替えることになった。しばらくはパチッと留めるタイプのタッパーでつなぎ、休日にお店で気に入ったお弁当グッズ一式を揃えた娘。その姿を見て、「ああ、社会人としての生活が始まったんだな」と思った。

「朝、私がやることある？」と聞いたとき、娘は言った。

「大丈夫。社会人だから、自分でやるよ。自立の練習だよ」

その言葉に、ほんの少しの寂しさと誇らしさが胸に広がった。

それから毎朝、５時半に起きて台所に立つ娘の気配がする。

私はといえば、お米を多めに炊いて冷凍しておくことと、前日の晩ごはんのおかずを少し多めに作って取り分けておくことくらいしかしていない。

「手伝わせて」と思う気持ちと、「任せて見守る」気持ちの間で揺れながら。

そんなある日、夫が言った。

「水曜は俺が作るわ。週の真ん中が一番しんどいやろ」

料理好きの夫は、それ以来、水曜日だけは誰よりも早く起きて台所に立つようになった。

卵焼きの焼き色にこだわり、詰め方に悩み、時には「彩りが足りん」とミニトマトをぎゅっと入れる。

娘は「本音を言うと助かる」と子どもの頃のような顔を見せる。

気づけば、長女のお弁当作りは、誰か一人の役割ではなくなっていた。

私が少し手を貸し、夫が水曜を担当し、娘はそれ以外の毎朝台所に立ち、「今日は鮭炒飯を作ってみよう」など試行錯誤する。

それはまるで、家族の中で静かにバトンが渡されていくようだ。

「家族って、こういうことなのかもしれない」と思う。

大きな出来事があるわけではない。
早起きすること。ご飯やおかずを多めに作ること。代わりに丸ごと引き受けること。
誰かが無理をするわけでもなく、特別な話し合いがあったわけでもない。
それぞれが自分の生活を持ちながら、その隙間で少しずつ手を伸ばしている。
そんな小さな行動の積み重ねが、気づけば家族を形づくっている。

娘が社会人になってから、家族の形は少しずつ変わった。
けれど、変わるたびに、私たちはまた新しい形でつながっていく。
朝の台所に立つ娘の背中を見ながら、私はその変化を静かに楽しんでいる。